



TITLE:

日蝕觀測行

AUTHOR(S):

坂上, 務

CITATION:

坂上, 務. 日蝕觀測行. 天界 1942, 22(252): 197-198

ISSUE DATE:

1942-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168382>

RIGHT:

日 蝕 観 測 行

坂 上 務 *Tutomu Saka-no-ue*

1941年9月17日 今日準備で忙しい。8月初より學校長に申し出て居たのが一昨日やつと許され、“鹿兒島高等農林學校日蝕觀測隊”として、物理學教室の藤瀬教授と筆者が行く事になつたのである。我々は勿論専門家と同じ事を同じやうに觀測に行くのでない、我々の出來得る範圍の觀測を體驗する爲に行くのである。携行器械としては、なるべく輕便なものを選んだ。即、筆者の7框ブッシュ經緯儀、ツアイスのプリズム双眼鏡×6、學校の小型クロノメータ、通風溫度計、自記氣壓計、照度計、寫眞機3個等である。氣象方面の觀測は藤瀬教授にお願いして、筆者は天文の方を引受けた。そして、自分の身の廻りの荷物をまとめて、やつと22時30分發門司行に間にあつた。

9月18日 快晴、午前10時基隆行の高砂丸に乗込む。船内廊下で山本一清先生にお目にかゝる。大喜びで、藤瀬教授と一緒に先生の御居室に先生を訪問する。かねてより寫眞では何度もお目にかゝつて居るが、ほんものの先生にお會ひするのは今日が初めてである。夜に至る迄、時を忘れて先生の御話を承る。同船者の井本進氏、飯義壽氏と共に觀測地の話等大いに話合ふ。

9月19日 本日は終日一片の鳥影をも見ない。昨日に引續き、相變らず先生の御話を承る。14時、船内食堂で山本先生が日蝕に關する御話をされる。來會するもの百餘名、何回も日蝕觀測に参加され、日本否世界中での最も多く日蝕を御覧になつたであらう先生の御話は、興味深々たるものがある。

先生の御講演後、有志者が集り、協議をする。日蝕觀測の目的で渡臺する人は今迄解つて居た人の他に、渡木氏、吉田氏あり、合計7名となり、愈々心強い。

9月20日 愈々渡臺の日である。心が勇みたつ。臺灣本島が見えるやうになると、妙に臺灣本土上の雲に氣がかゝる。

基隆に着くと、天體觀測同好會の吉村氏等が來て居られ、萬事骨折つて下され、實に有難い。直に臺北を経て富貴角に向ふ。途中、内地には珍しいバナナ林を眺め乍ら、17時富貴角の燈臺に着く。既に觀測の爲到着して居られる方が二三十名あり、非常に賑やかである。夜、一緒に懇親會が開かれ、皆、我を忘れて話合ふ。

後刻、就寢前、もう一度空を見る。ドンヨリと曇り、星さへ出て居ない。約4軒南方の小基隆の方が少し晴れて居るやうに思はれて仕方が無い。

明日の事を考えると、無理に神經が興奮して來て、仲々寝られない。

9月21日 愈々待ちに待つた日蝕當日である。朝早く起き出で、東方を遙拜し、本日の成功を祈る。燈臺前の芝生で、皆一緒に楽しい朝食を攝る。

朝の中は天氣具合良く、雲量は2~3である。然し、風が強い爲、觀測者一同燈臺南側の低地に器械を据えつける。藤瀬教授は季節風の影響を考慮せられ、數町離れた畑の中で氣象觀測をされる。

もうすぐ日蝕が始まる。緊張感と同時に、何か知ら威壓するやうな力が迫つて來るやう

だ。皆既中の練習を夢中でやる。空はと見れば日蝕が近づくに従ひ、愈々雲量が増加し、不安になる。第1蝕の頃は、太陽附近に幸ひ雲無く、十分観測された。予定より少し遅いやうだ。日蝕は始まつた。落着かない氣持を無理に落着かせ乍ら晝食を攝る。

13時になると、蝕された太陽は時々雲から出る程度に雲が深くなつて了つた。加ふるに小雨さへ降り出し、非常に心細い。13時40分になり、山本先生の時計係は時刻を聲高と讀み初める。然し、どうも太陽は姿を表しそうにない。「ゴー」と突然山本先生の號令が下る。20秒経過した。雲足は幸に早く、其の切目より月に陰された太陽が、實に見事なコロナ、そしてプロミネンス、續いて又雲に入り、又出、結局都合3回程雲が切れたやうだ。此の間、筆者は肉眼及7麵屈折×20にて、心ゆく迄コロナ及プロミネンスを見、同時に、寫眞機のシャッタを切る等、忙しい。

肉眼で見たコロナの光は、空に雲が高かつた爲か、相當強く感ぜられ、又周圍より來る光の爲、皆既中と雖も新聞の字がよく見える程度に明るい。遠く海上を見渡すと、ずつと向ふが朝焼の感じに少し似たやうな美しい五色の光を放つて居る。コロナの色は、今迄見たり聞いたりして居たものよりずつと違ふやうだ。麗はしきものといふより、寧ろ神秘的である。時計係の讀みは110にも達した頃、蝕の時刻測定の爲望遠鏡にすがりつく。やがて輝しい光が現れた。約10秒間ダイヤモンドリングが見られたが、特に最初太陽の西南隅からピカリと光つたダイヤの御光の如きは、一生忘れ得ざる壯觀であつた。

生光後、又雲が深くなり、ほんの時々太陽が薄く雲を通して見られる程度となり、第4蝕は全く駄目だつた。

兎に角、日蝕が終つたので、安心してか、急に連日の疲が出て來て、筆者は思はずその場に坐り込んで了つた程である。

直ぐバスが出るので、大急ぎで器械を片付けて、臺北に向ふ。筆者等のバスは、都合悪く、故障續出で、臺北に着いたのは翌日の午前2時頃であつた。

9月22日 藤瀬教授と一緒に臺北帝大に行き、物理學教室で、昨日の日蝕に使用した地球物理の諸器械を主任教授の方より見せて貰つた。

夜は、公會堂で、山本先生を圍み日蝕の印象や成績を語り合つた。

9月23日 朝臺北を出發し、基隆に向ひ、直に門司向〇〇丸に乗込む。山本先生と門司這一緒であり、非常に好都合である。

9月24日 本日も先生の御話を承る。日蝕數章（皆既日蝕を觀た者に限り佩用する）の照等出て大いに賑ふ。

9月25日 朝、門司上陸、驛にて山本先生とお別れする。筆者は井本氏と一緒に鹿兒島本線に乗込む。翌朝歸還す。思へば、9月17日鹿兒島を出てより、實にあはただしい旅であつたが、種々思出での深い日蝕觀測行であつた。

終りに臨み、初めから終迄、種々の點で非常にお世話して下さいました會長山本一清先生、在臺北中非常に骨折つて下さつた吉村氏に對して、厚く感謝します。

後記 氣象觀測の結果は未だ發表に至らないが、溫度は皆既直後2度（攝氏）下り、照度は皆既中7ルツクス、溫度は上昇、氣壓はジグザグな變化を示した。筆者のコロナのスケッチは山本先生に、前寫眞と共にを送りした。一終一